

日本福祉大学社会福祉学部・日本福祉大学福祉社会開発研究所

『日本福祉大学社会福祉論集』第114号 2006年3月

史資料

## 愛知県における社会事業行政の成立

—— 故・三上孝基氏インタビュー記録 ——

永岡正己

はしがき

本稿は愛知県の初代社会事業主事として愛知県社会事業行政の整備にとりくまれ、のち名古屋の民間セトルメントの先駆けである衆善会の主事・常務理事として活躍された三上孝基氏のインタビュー記録をまとめたものである。お話の中心は愛知県時代であるが、三上氏は愛知県赴任以前に大原社会問題研究所の設立当初に社会調査活動に参加し、また埼玉県社会事業主事として福利委員制度や埼玉県共済会等の組織化にも先駆的な役割を担われたので、インタビューではそれらのお仕事の全体にわたってお聞きしている。なお、このインタビューは1978年11月29日に社会福祉法人・衆善会において行ったものである。その後も何度かインタビューを行っているが、ここには最初のものだけを掲載した。なお、戦後に関する部分とテーマに関連しない部分は省略している。

インタビューは社会事業成立期研究、愛知県社会福祉史研究の一環として行ったものであり、すでに四半世紀が経過しているが、愛知県における社会事業成立の状況が詳しく語られており、また草創期の大原社会問題研究所や内務省社会課、埼玉県の社会事業行政の様子にもふれられていて、きわめて貴重なものである。関連する各種の年史や記念誌がいくつかあるが、いずれにも触れられていないエピソードが含まれており、今回史料としての重要性を思い、歴史記録として印刷することとした。タイトルはお話の中心部分から「愛知県における社会事業行政の成立」とした。個人名や部落差別に関する部分については、基本的に歴史資料としての価値の面からできるだけ残したが、プライバシーと人権、差別撤廃の観点から不適当と思われる部分は割愛した。また、人名等、最低限必要なところは（ ）で補った。

三上先生は、愛知県社会福祉史研究の発展を期待され、自らも研究を継続しておられた。それにしても、結局三上先生とご一緒に愛知県社会福祉史をまとめる作業を中断したまま、その後三上先生がお亡くなりになり、それからさらに長い時間が経過してしまったことをお詫びする他ない。まことに遅い歩みであるが、これから作業を続けたいと思う。

三上孝基氏の履歴と業績を簡単に振り返っておくと以下のとおりである。

三上氏は1893年11月3日、滋賀県高島郡に生まれた。家は真宗本願寺派の寺であった。一高を経て東京帝大文学部哲学科で印度哲学を専攻し、1919年卒業後、7月に暉峻義等の推薦で大原社会問題研究所に入所した。そして翌20年5月内務省に転じて地方局社会課嘱託（8月社会局）となり、さらに同年12月埼玉県感化救済事務嘱託となり、翌年3月埼玉県社会事業主事となった。1922年4月に最初の愛知県社会主事（のち社会事業主事）となり、社会事業行政の中心として方面委員制度、社会事業協会組織化、保育・隣保事業、地域改善の取り組み等施設や住宅設立にあたった。

その後、1928年4月招かれて財団法人浴風会横浜分園園長、1929年猿江善隣館館長として事業創設と基盤づくりに携わった。1933年松坂屋の伊藤次郎左衛門によって財団法人衆善会の設立が計画されると、その責任者として同年12月主事、常務理事となり、社会事業助成、母子寮建設、タイ留学生育英事業などを行い、1937年には民間セツルメントとして衆善館を開設して保育、授産、診療、学童クラブ等の事業を展開した。また戦時下にかけて保母養成所、司法保護事業等、事業を拡大した。1945年には衆善館も罹災し疎開したが、戦後再建し、1948年には乳児院を開設した。三上氏は、館長、院長を兼務し、その中心として一貫して衆善会の発展と地域の生活福祉の実現に努力した。他にも職務の傍ら1935年から保護司としても活動を続けている。

戦後は衆善館館長の傍ら、1951年から愛知県立女子短大講師、中部社会事業短大講師を兼任し、さらに1962年からは同朋大学教授として社会福祉、保育の研究・教育にも従事した。1982年には衆善会の役職を退いたが、最後まで施設の発展を見守り続け、1987年3月30日、93歳で逝去された。なお、乳児院院長として後を継いだ長男の三上孝夫氏も1990年7月1日に亡くなった。しかし、衆善会はその後も創設の精神を守って発展している。

三上孝基氏のご研究には、戦前の「愛知県社会事業概観」（『共存』1巻1号～2巻2号、1925～1926年）、「米国の児童委員制度」（『共存』1巻）、「方面事業並隣保事業の理論と実際」（大連市民生課、1942年）、その他、各社会事業雑誌に寄稿された論文があり、戦後も「愛知県社会福祉史管見」（同朋社会福祉、7～9号、1979～1981年）、「六十年前における福祉愛知の回顧」（同朋大学論叢、44・45号合併号、1981年）、翻訳ではキャスリーン・ウッドルーフ『慈善から社会事業へ——イギリス及びアメリカ合衆国における社会福祉の沿革』（中日文化、1977年）など多数ある。なお、このインタビューの内容と重なる部分が「愛知県社会福祉史管見」「六十年前における福祉愛知の回顧」にも記されているので、ご参照いただきたい。

三上孝基氏の生涯とお仕事については、かつて「三上孝基」（田代国次郎・菊池正治編『日本社会福祉人物史（上）』相川書房、1987年所収）、「戦前愛知県における社会事業調査の展開」（『名古屋市社会調査報告書（含愛知県）』全50巻、別冊解説、近現代資料刊行会、2004年）でふれたので、合わせてご参照いただければ幸いである。

三上孝基先生の生前の重要なお仕事足跡が、社会福祉の実践と研究に継承されることを願うとともに、愛知県社会福祉史研究の今後の発展を期待したい。

## 1. 草創期の大原社会問題研究所と社会調査

### (1) 大原社会問題研究所に入って

永岡：今日は、三上先生のお仕事の歩みについて、とくに愛知県庁時代のお仕事と社会事業協会のことを中心にお話をお願いしたいと思います。どのような考え方で方面委員制度を愛知県で組織されていたのか、また、共存園や雑誌「共存」刊行のことなどについてもお教えいただければと思います。よろしくお願いいたします。

三上：実は今、私、愛知県の社会福祉の明治以降の社会福祉の状態を書きかけているんですよ。明治以来の社会福祉と申しますと、明治15年に愛知育児院ができたのが最初です。愛知育児院を森井（清八）さんが計画したのが明治15年で、それからのことを今書いているんですが、これは同朋大学の「同朋社会福祉」に出すだろうと思っています。

永岡：三上先生ご自身、当時、愛知県社会事業協会の機関誌の「共存」が刊行された時に、愛知県の社会事業の概説をまとめられて、大正期の社会福祉の状態を連載されておられますが、当時の状況はどうだったのでしょうか。

三上：「共存」を御覧下さったんですか。どこにありますか。

永岡：鶴舞の図書館にも半分ほどありますが、大阪府立図書館に、大原社研の資料が残っていて、そこにはほぼ揃ってまして、それを読ませていただきました。

三上：あれを「共存」に書きましたのはね、私が愛知県の社会事業協会の主事をしている時ですけど、あれはほんのその時のことを書いただけで、全体については書いておらんと思うんですけどね。

永岡：もう一つお教えいただきたいのは、方面委員制度をつくられた時のことですが、大阪との関係が随分強い感じがするのですが、その時の経緯をお聞きできればと思います。

三上：そうですね、それじゃ大体概略を最初からお話ししましょう。私、学校は東京帝大のインド哲学を出たのですが、実は坊主になるのは自分で嫌いなものですから、専門の勉強は大していたしませんでした。学校を大正8年に卒業しまして、とにかく兄弟が4、5人はおりますから、その学資を稼ぐ必要があったわけです。とりあえずどこか就職せんらんという考えから、ちょうどその時に私どもやはり同じ宗派の先輩で暉峻義等さんが、大原社会問題研究所が出来たばかりでして、研究員を捜しているから来んかという暉峻さんの勧めで、大原へ入りましたんです。その時に大原には社会問題研究と社会事業研究、この二つがあって、社会問題研究というのはいわゆる労働問題の研究のほうなんですね。その方は高野（岩三郎）さんですか、東大の経済学の高野さんが中心でして、社会事業の方は小河（滋次郎）先生が部長をされてね、それから高田慎吾さん、暉峻義等さん、社会事業関係ではそんなもんでした。そこへ私が入れてもらって、名前は研究員でしたが、何も知らないほんの助手にもならないような立場に入ったんです。まだ大原研究所は建物が出来ておりませんから、事務所が愛染橋に建っておりまして、私どもは、暉

峻さんと私なんです、東京の大学の生理学教室に厄介になりまして、暉峻さんは、その部屋を借りて、大学の研究所の中に一人で奥さんと別居して住んでおりました。

(2) 八王子乳児死亡調査に携わって

永岡：場所はどこだったんですか。

三上：東大の中。東大の生理学教室の教室の一部ですね。そこへ私が毎日出勤して仕事をしていました。その時の仕事はいわゆる大原研究所の社会事業方面の最初の仕事なんです。その仕事として暉峻さんが八王子の乳児死亡調査を始められましてね、アメリカの労働省の乳児死亡の担当機構が手伝っていました。それが二、三ありましたな。それによりましてですね、どこか日本の都市の乳児死亡の調査をやりたいという場所を捜されたんですが結局、東京の近くでは八王子市が一番手軽なんじゃないかということで八王子市の乳児死亡調査をすることになって...、これが大原での社会事業関係の調査の一番最初でした。それを私は手伝ったわけですが、その八王子調査というのは、あれは何年でしたか、私が卒業したのが大正8年ですから、たしか大正6年の一年間で、八王子で生まれた子どもを全部追跡調査してそれが満1歳までの間にどうなったかということを調べたんですね。確か夏でしたから、大正8年の夏に始めたんですからそれから2年遡って、調査の最初の対象が2年遡っているわけです。生まれてから満1歳になるまでを追跡調査するんですから調査される期間が1カ年、そのもう一つ前に生まれたことになりますね。そういうふうで、確か大正6年に生まれた子どもあるいは6年の夏以後だったかもしれませんが、とにかく2年前の誕生日から調査するというんで、それで市の戸籍簿をみせてもらいまして全部を写しまして、それを個々の子どもについて家庭訪問して調査する.....、数がいくらかあったです。最後に不明やなんかありますので、転居先など分からんというものはオミットしますので、最後には九百いくらかの数になったと思いますが、それだけ追跡調査したわけです。

その時に私一人じゃ無理だというんで越智道順、萩原久興が入りました。で、その人たちと3人で、実際は越智君と私が主にやりましたが、八王子にも出張しまして、あそこのお寺を借りて部屋で調査をやったんですが、難儀なことでした。たしか真言宗の寺でしたね。調査をやってまして、暉峻さんが一週間に一遍くらいやって来られて様子を見られるということで、大分時間かかりました。東京へ転居している者もありますから、そういう場合は東京の転居先までいちいち調べて調査するんですから、東京で一人調べるのに2日も3日もかかるというようなケースもありましたですね。

調査自体はそう面倒なことじゃなくて、子どもが1歳まで生きておったかどうかということで、現に生きておればその子どもを見せてもらって、それが1歳まで母乳だったか...、いつから牛乳にしたかということを聞くんです。それから健康状態について、1歳になるまでに死んだ子どもの場合は死因を聞くというようなことでした。それが項目は多くないんですけど、1歳までは生きとったがその後死んだ家庭になりますと、もうほとんど話もしてくれないようなことなんです。子どもがおりますと、いろいろ聞けるんですが。そういうような家庭もありました。それも

分かるだけのことを調べるということを翌冬まで、大正9年の正月なんかまだやっとりましたですね。そのまとめを暉峻さんが1年後にされまして、これが確か「八王子乳児死亡調査」(『乳児死亡の社会的原因に関する考察』大原社会問題研究所叢書 2, 1921年)という、この分野では日本では一番早い調査だということになっております。多分暉峻さんのアルバイトになったんだらうと思いますが。

### (3) 研究所の運営と研究活動

それから、その間に1, 2回大阪に大原研究所の全員の会合がありましてね、その時は私ども東京から出張いたしまして、それに参加しましたですね。

永岡：年に1, 2回ですか。

三上：まだあの時は最初ですからね。月1回やるということになっとったんですけど、暉峻さんが行けなかったのか、とくに重要な会議だから出て来いということで行ったのか、そこらはよくわかりませんが、月に一遍ずつ集まるということになっていたらしいです。

永岡：大原社研は、最初、社会事業の研究部門は、社会事業研究所というふうに分かれていますね。

三上：社会問題研究所の中に労働科学研究と、それから労働問題研究と社会事業研究との一部と二部があったんです。二部の方は、これはほんの付け足しのようなもので人数からいって第一の労働問題研究の方が非常に盛んでして、当時の東大、早稲田なんかの経済関係の先生たちを網羅したようなものになっていまして、森戸(辰男)さんは初めから研究員でした。大内(兵衛)さんは後でして遅かったですね。森戸さんなんか中堅どころでその、もう一つ上の大家は河田(嗣郎)さんなんかで、大勢おりましたよ。

永岡：社会事業の研究は、最初は東京でやっていたということですか。

三上：社会事業の方で向こうに行っていた人は大阪府の嘱託の小河さん。その頃はもう嘱託をやめておられたと思います。

永岡：まだその時期は続けておられますが……。

三上：もう、嘱託をやめておられたでしょう。

永岡：やめられるのは大正13年になりますか。

三上：そうですか。するとまだ名前だけはあったんですね。病気でほとんど休んでおられました。

永岡：大阪府では社会課の方がみな自宅に行かれて、会合をされていたと聞いております。

三上：そんなところでした。それで私が参りました最初の会の時は、小河先生は出られませんでした。社会事業関係では高田慎吾さんと暉峻さんと私だったですね。その他に助手的な人が一人か二人おったでしょう。その時集まったのは14~5人だったようでしたが、大部分は京都や東京の大学の先生でしたね。高野さんは来られませんでした。

永岡：高野岩三郎さんは最初ずっと東京におられたのですか。

三上：出られませんでした。東京におられて、私があの時会ったのは北沢新次郎さん、あまりはっ

きりしませんが、京都の先生が多かったですね。

永岡：大体、大原社研の雑誌なんかにも書かれている方々ですね。

三上：そういう人が大勢おりました。

永岡：大原社会問題研究所が出したものに1920年に創刊された『日本労働年鑑』『日本社会事業年鑑』『社会衛生年鑑』がありますが、その経過はご存知でしょうか。『社会事業年鑑』は高田慎吾の仕事として重要だと思うのですが。

三上：あの編集は、私も材料集めに随分歩きましたがね。最初の年鑑も暉峻さんが考え出したんです。年鑑つくろうと言われましてですね、その構想はずっと自分でやられまして、そして、この件をどこへ行って調べてこい、材料をとってこいと命じられ、私どもが動いたんですが、東京の高等師範に行って障害児の教育の現状を調べましたり、動物愛護の事実だとか調べて……、チリ硝石のことなんか分からなくて随分苦心したもんですがね。それが大原での私どもの関係した仕事で、他にこれといったものはありませんね。

永岡：そうしますと、八王子の調査を終えられてから年鑑作成の作業に移られたということでしょうか。

三上：八王子をやっている最中です。八王子の調査を間をおいてやりまして、暉峻さんはかなり……他のことに興味を惹かれると、その方をすぐやらされるんです。それでしばらく八王子の調査をやっていなかったら、もっとやらんといかんと行って、たしか翌年1月頃になってから、君ら、私と越智道順君でしたが、君ら八王子に行って、旅館に泊まっていいから、人や車使って調べて、金がかかってもかまわんと言われましてね。それで八王子の旅館に泊まりまして、毎日じゃないけど今日の自動車の感じで人力車を使って、郊外の転居先を調べたりしました。八王子調査は前後して一年以上かかったでしょうね。

#### (4) 高田慎吾、暉峻義等、その他の人々

永岡：その時の調査は、高田慎吾さんはかかわっておられなかった？

三上：高田さんはね、その後で亡くなりました。

永岡：こうした調査には全くタッチされていないんですね。

三上：全然されていない。もうそれは暉峻さんが考え出して自分でやったんで、確かその時随分金があった、2千円いったと本部に文句言われたと言っておられましたね。それであの調査の報告書が出来たのは私どもも見ませんでした。そのうち私はあそこを辞めましたからね。辞めたのは翌年の大正9年の4、5月頃だと思います。その時は暉峻さんまだおられました。

永岡：その頃の高田慎吾さんの仕事というのは主に児童問題だったのでしょうか。

三上：全般の研究ですか。個人的にはやっておられたでしょうが、大原研究所としての研究というのは緒についておらなでしたね。

永岡：最初はみな個人的にやっておられる部分があったのですか。

三上：個人的にやっているのと、それから高田さんはことに大原研究所の全体の管理という仕事



をもっておられたでしょ。大原さんに大変信頼されてましてね、その間に伶人町の大原研究所の建築やら、そういう雑用が多かったんじゃないかと思いますね。ですから、あの人は大原に入ると決まるとすぐ内務省の方を辞めて、それで大阪に引っ越されたんです。

永岡：研究所の運営を中心的にされていたんですね。

三上：ええ、大変大原さんに信頼されておられたようですね。

永岡：その頃は大林宗嗣さんはまだおられませんでしたか？

三上：大林宗嗣さんは内務省におられたんじゃないですか。

永岡：設立時から所員で研究所からセツルメントの研究を早くまとめておられますが。

三上：私は内務省で一緒になりましたよ。大原の関係でしたか……。

永岡：研究所の中や会議などで、実際にはそういう印象だった？

三上：その頃から大原研究所でもお会いしましたことはありますが。

永岡：それから、越智道順さんについても大阪時代のことを調べているのですが、大阪府の社会事業主事の川上貫一さんなどと非合法の活動にかかわって、昭和8年に一緒に検挙されるのですが、当初の思想はどうだったのでしょうか。

三上：あれはね、社会事業関係だったんですけど、越智君が八王子の調査を少しやってから大阪の方へ行かましてね。大原研究所の助手になったでしょう。その頃、八幡製鉄のストライキがありましたですね。それに大原の研究所員がオルグとなつてだいが行ったらいいですね。助手関係の人がね、そういう関係で……。

永岡：助手として八王子調査に入られた頃は、あまり社会主義の思想はなかった？

三上：ええ、それは全然ないです。私と同じように……。

永岡：越智さんは当時大学出たばかりの頃ですね。

三上：ええ、あの人は駒沢大学だったか。

永岡：初めは何か仏教の立場だったようにお聞きしましたが？

三上：ええ道順といいますから、そうですけど仏教的な関係はあまり聞きませんでした。萩原君というのがおりましたけど、この人は日蓮宗かなんかの関係の方でやはりお坊さん出身でした。

永岡：多くの人は、大原社研に入ってから社会問題意識が強くなったんですね。

三上：そうなんです。私はどうも労働問題の先生たちの話があまり私共の従来環境と違うものですから、どうも馴染めないんですね。もうひとつ、暉峻さんなんかでもやはりそういう気分があったでしょう。

永岡：そうですね、倉敷の労働科学研究所は少し違いますね。

三上：労働問題の方と一緒に会合やりましてあまり発言されませんでした。ただね、暉峻さん、こういうことを言われましたよ、皆の先生に。あの時分、8時間というのが非常に問題になっていまして、労働は8時間でなくちやいかんとか……。もちろん日本ではまだ実行されるなんてないんですけどね、その時に暉峻さんが8時間労働というによくヨーロッパでも言っているが、労働の8時間というのは何か医学的か生理的かどういふ根拠で8時間というのが出るんだろう、何

が根拠があるんだろうか、ということをお労働問題の先生たちに聞かれましたよ。で誰も答える人はなかったですがね、まあ10時間は長すぎるし、それを短くして8時間にするんじゃないかというぐらいな意見で。暉峻さんは、8時間労働というものを、8時間ということ割り出される根拠を掴みたいと……。生理的に考えたかったらしいですけどね。誰もそれについて意見を言う人はなかったですから。

永岡：そういうことから、労働科学の方へ進まれたんですか。

三上：労働科学の方でも、8時間というのは、結局10時間が長すぎるから8時間にしよう、12時間が10時間になり、それから8時間になって……。まあ、今後どこまで短くなるか分からないというような結論だったと思いますね。そんなふうですから、まだ労働問題の方でも結論は、労働時間は8時間にして労働組合を承認するという、法的にちゃんとする、それが何より今の日本の緊急の問題だということをおっしゃられたです。それは日本ばかりじゃないです。世界がそうだったんだからね。一人でよく発言されましたね。

永岡：三上先生はなぜ、研究所をお辞めになったのでしょうか？

## 2. 内務省社会課から埼玉県庁へ

### (1) 内務省社会課（社会局）での仕事

三上：それは、やっぱり今申しましたように、どうもあまり、なんと申しますか、俗な者には労働問題研究の空気が尖鋭化していますから、どうもその中に馴染めなかったんです。その時に私よりも私の父が、どうも大原はちょっと社会主義的傾向をもっているの、ああいうところにおっちゃ危ないから、というので、ちょうど私の縁故先に内務省に勤めているのがいたものですから、その方に頼んで内務省に入れてもらいたいという、そしてしたらその方から内務省へ来んかという勧誘を受けまして、それで内務省へ行ったんです。最初は親父の方が言い出して頼んだらしいんです。

永岡：内務省はちょうど社会局が出来た頃ですね。

三上：前です。まだ私が初め内務省に行った時は田子一民さんが課長でした。そして課長の下に入ったんです。内務省が社会課になってまもなくだったでしょうね。それまでは救護課で、丸山鶴吉が課長で、田子さんが洋行しておられました。社会事業関係の方を担当するということで、調べるために洋行したようだったですね。それが帰って来られたばかりだったでしょうね。それで、私入れてもらって、その時は社会課は出来たばかりです。地方局の中の、都市計画課ですか、その第三の課として社会課が出来た時だったと思いますが、全員で7、8人おりましたか、そこへ嘱託という名前で……。地方局の局長は協調会館の館長となった添田敬一郎で、あの人の下に入ったわけです。

永岡：床次竹二郎さんが一番上におられた時期ですね。

三上：大臣でした。そして内務次官が小橋一太。私を世話して内務省に紹介したのが小橋一太



さんです。

永岡：お勤めになって内務省の雰囲気や仕事内容はどうだったのでしょうか。それから、すぐにお辞めになっているのは、最初から県の主事に異動する予定だったのでしょうか。

三上：内務省におりましたのはほんの6、7ヶ月ですね。それはね、田子さんが学校出の者を各府県に配属して各府県の、いわゆるその頃の社会事業主事ですね、それをつくりたいという意向があったんですね。ですから内務省へ入りたいという希望のある学校出の者を入れたわけです。私はその早い方だったんです。

内務省でやりました仕事は、そんなふうですから、まあ地方行政の見習いという意味だったでしょうが、ほとんど仕事らしい仕事はないんです。一番、話を提供してくれたのが相田良雄さんでした。あの人はね、辞めて嘱託が何かになっていたと思います。それから伊藤さん（伊藤隆祐）など、いわゆる判任官が3、4人おりましたね、最初にやらされたのが田子さんからパンフレットを渡されて、アンエンプロイメント、失業問題のパンフレットでした。

永岡：イギリスのパンフレットですか。

三上：イギリスでしたか、アメリカでしたか、どちらかの失業救済の役所のことが書いてありました。そのパンフレットを、これ訳せと言われましたね。そしておぼつかない英語力でボツボツやとったんですが、田子さんがイギリスに何カ所くらい職業紹介所があるかと言われましたから、たしか私は24カ所くらいあるというのを今うっすら覚えてますがね、職業紹介所の分布がどういう範囲で、どのようになっているかということを知りたかったんだと思います。それからその他に、当時のジュネーブの国際連盟の方からよくいろんな書類が参りまして、それに対する日本の態度を決めるという……。

とくに私がよく見た文書ではホワイトスレイブの問題がありましてね、それがだいぶありました。初めて私は日本のホワイトスレイブがどんなにマレー半島やなんかの方まで大勢行っているということを知ったようなわけです。それに対して最後に、日本の国内における娼妓の問題を廃止することについての日本の考えを回答しろということがあったと思いますよ。それで一生懸命になって、当然これは廃止すべきものであるという案を作りまして課長に出したんです。課長はそれに少し手を入れて、他の局へ回覧させたいです。そしたら結局、警保局でこれはもうとくに解決しているんだ、日本じゃ娼妓の人身売買はしないんだ、娼妓というのは自分が楼主の部屋を借りて自分勝手にやっているんだと言う。娼妓というのは、人身売買というのはやむをえないんだという、こういう牽強付会な回答をしましてね、それを外務省にもって行けというわけで、私は警保局が直したものを持って行きましてね。そしてそこに私の中学の同級生の小林というのがおりました。のちにイランの公使になりましたが、それがこんな回答は出せるものじゃない、体制順応だと言って笑っておりました。国際連盟から来るものに対しては、大部分が体制順応だと言っておりました。まあ、そのくらいですね。覚えておりますのは。

(2) 埼玉県への赴任

永岡：それから埼玉県に移られるのですが、移られてからどのようなお仕事に取り組みましたのでしょうか。

三上：内務省はそれっきりで埼玉県に行きました。岡村準一君が埼玉県の社会事業の囑託として、あそこで埼玉共済会のいろいろな構想を大変細かくやっていました。岡村準一という人は外語学校出身、ドイツ語かなんかの出身だと思いますが大変学者的な人でしたね。ドイツの制度なんかをよく研究して、共済会の規定を設けておりまして……。埼玉県の福利委員というのがありますが、あの時の知事が非常に熱心な人でしたね……。早く亡くなりましたが。社会事業方面では埼玉県は非常に早く進歩しておりましたが、その知事のおかげだったですね。その知事のもとで岡村君が委員制度をつくったんですが、利用する施設が全然ないんです。それですから、小資融通とか負債償還とか、いろんな制度の規則をつくりまして、福利委員が出来ても使うべき武器がないものですから非常に困っていた、そういう点につきまして、いろいろ細かく制度を設けておりました。

その岡村君を内務省が引っ張り出して、その後に、私に行けと言うので、大正9年の暮れに埼玉県に行くように決まりましてね、そして10年の1月から、その時はまだ主事という名前はなかったんですが、埼玉県に行きました。岡村君がつくっておいてくれた福利委員の指導をやったのです。そこへちょうど前年にいわゆる部落改善の問題が貴族院で出たんですね。大江卓の……、その関係でそれが政策化されました。10年1月に埼玉県に初めて出ました時に、8千円の部落改善費が計上されていたわけです。これを3月までに絶対使えというのが課長からの命令だったです。一方で福利委員の指導とそれから部落改善費の使途をどうするかという問題で……。ところが私は部落についてですね、あることは知ってはいましたが、一体どんな状態なのか全然知らなかったんです。私の出身は滋賀県でして、湖水の西の高島郡なんです。あちらの方にはいわゆる部落はほとんどなかったんですね。湖東の方には随分多いんですけど、湖水の西の方にはほとんどありませんでした。小さい時から聞いてはおりましたが、埼玉に行って初めて部落問題にぶつかりましてね、弱ったんです。課の者に聞きますと、えらいものに当てられたと皆から脅かされて、ますますどうも困ったんですが、とにかく部落についての帳簿がありまして、それを見ると3軒か4軒と続いているんですが、それを読んで数えてみますと305部落あるんですね。調査数はあの時埼玉県は272町村ですか。それに305の部落がある。そして1町村に2カ所以上あるところがだいたいあるわけなんですね。どうも分からないから、実際に調べて自分で視察してみようと思ひましてね、課長に相談し、よかろうと言うことになって、それから内務省に一週間出張させて下さいと連続出張の許可を得て、主だった部落を6、7カ所、数の多いところを予定して、ただ行っただけじゃ分らんから、泊まって皆で話を聞こうという計画を立てました。埼玉へ行っても一月も経たない時でした。まず最初に割に大きな部落だったと思ひましたが、そこへ行きました。行く前に人に聞くと、突然行ってもとても自分たちの様子を話してはくれない、えらい目に遭うぞとさんざん脅かされまして、それに、聞いても皆全然知らない。それで、私は前に大江卓

さんがやっている雑誌を見たことがあるんです。

(3) 地域改善の取り組み

永岡：帝国公道会の雑誌ですね。

三上：公道という雑誌，それを思い出しましてね，これは一つ大江卓さんを訪問して紹介してもらったらいいいと思ひましてね．それから大江卓さんの住所を捜したんです．だいたい郊外ですが，そこにおられることがわかったんです．それで，埼玉県社会事業主事という名刺をお渡しして，今度こういう仕事に携わることになったんです，一つ實際をよろしく先生から伺いたいと話しましたら，大江さん，病気で寝ておられましたが，それは重大なことだと話しておられました．80歳以上だったですね．小さい家でしたが，二階へ上がって床から起きあがって大江卓さんのそばで話をいろいろと聞いたんです．1，2時間熱心に話してくれましてね，大変重大な問題だと言われて，初めて大江卓さんから部落問題の話を直接聞いた訳なんです．これは得難い私の経験だったです．

そして君が部落に泊まって歩くなら非常にいいことだから，おれが一つ紹介状を書いてやる．そうすりゃ決して皆が言うような心配なんか決していないからと言って，5，6通私の前で書いてくれました．私は非常に激励されましてね，そして県内の部落視察に出た訳なんです．最初に行きましたのが浦和の近くの部落でしたが……，部落に入ると一種の臭いにおいがしましてね，嫌な気もしました．その宛名の家へ行きますと相当大きな，その村での豪農なんでしょうね．向こうは最初は胡散臭そうな目で見てましたけど，早速大江さんの紹介状を出したものですから，それから掌返すように変わりましたね，そして上がってくれと言うので上がって，奥の座敷を掃除するやらで大騒ぎしましてね，そしてだんだん話を聞いてみて，大江卓さんの信用というか，勢力は大きなものだったですね．

そのうちに，村の人たちが5，6人やって来まして，いろいろな話をする．自分たちがどんなに差別されて苦しんでいるかということを話をするんです．私は何も言うことがないから聞いているだけですけど，それがよかったですね．なまじっかこちらが言わんほうが，皆言うだけのことを言うとは，ほんと気が休まって……．そこでこちらはその8千円の金の使い道を考えるように言われているので，どこか悪いところはないか，少しは金が出るんだからと聞くと，ああ，それならいろいろな出ましてね．その時に，当時，ム口（室）というのがあって，それが良くないんだという話でした．

ム口というのはね，11月の末ぐらいですかね，皆農家ですからね，農家といっても田畑は持っていない農家として，仕事は下駄の表ですね，今はもうありませんけど．雪駄，履き物の表を編む仕事なんですね．草履表というんですかな．それを編むのがあの辺の当時の仕事ですね．それをやるのにね，あれの材料はシュロの葉のようなものですね，それをさらして湿らせて編んでいくんです．乾燥すると折れて上手く編めないで，湿らせておく必要があるんです．そのために，冬の乾燥した時に家の外に，家がこれですとその前に大きな穴を掘りましてね，六畳か八畳ぐら

いに掘ってその土を盛り上げてましてね、そして上に出入り口を作って、いわゆるム口をつくるんです。そこへ家中の者が皆入って七輪を持ち込んで、布団も、ランプも、びろうな話ですが便器まで中へ持ち込んで11月、12月から3月ぐらいまでの間その中で生活するんです。家はがら空きなんです。

そういう生活なんですね。ですから目にも良くないし、いろんな病気も移りやすい。それに、相当金がかかるから一軒だけで作るわけにはいかない。何軒が共同して作るんですね。男女老若全部ですから、どうしても風紀上も良くないということで、このム口をなくすことを、あの人たちが自身が自覚しているんです。ム口を何とかしてなくすようにしたい、こういう話なんです。どのくらい金出せば出来るのかと聞くと、まあ4、5百円あれば出来る。どうするんだといったら、家の中を三方壁で囲って一カ所を入り口として、そしてそこで湯気を立てて湿らせるという。そういうム口代わりの仕事場を作るには、やはり4、5百円かかるという話で、その一部を補助するというところで……。

それは結構だという話で、8千円の使い道はム口を廃止してム口代わりの部屋を作るということとを皆に奨励して、それに対していくらかの補助をするということにしようという案がその場で出来たんです。そして、そのうちに村中の人ほとんどやってきて御馳走したり、風呂へ入れと……。ここで入らんとまた信用を落とすと思ひまして、みんな目の病気の人が多いですからね、目を洗わんと風呂に入ったです。そしてゆっくりして旅館で泊まるより余程優遇されて泊めてもらって……。そして次々と行きましたら、すぐ明るく日には次の場所に注進が行ってましてね、県庁から役人が来るんだと……。明るく日、隣の村へ私は自転車で行きましたが、行ったら家に国旗がかかっているんですよ。

どこへ行ってもム口廃止というのは何より結構だということでした。それで一週間ほど方々見て歩いて、県庁へ帰るなりその報告を出しました。そしてどういう方法で補助金出したらいいのかわからないので、やっと課長に聞いて、衛生関係だから警察の手でやったらいいということで警察の衛生課の方へ相談しました。そして、その時の8千円といえば今じゃ相当な額ですからね、せいぜい200円か150円かの補助金を出すということで、警察の手を煩わせて出しました。そうしたらどうも県内のム口が一度に全部なくなったということです。警察が、ム口を廃止せよ、それにはいくらかの補助金を出すということでやったらいいですね。補助金の方になるところからはあまり関係なしに警察の手を煩わした訳です。一年でム口がなくなったことは、これは大きな私の経験でした。その頃ですね、水平社の問題が奈良、京都で起こってくるのは……。

永岡：ちょうどその年ですね。1921年……。

#### (4) 地方改良委員のこと

三上：そうですね。埼玉県は融和親善という言葉を使い出してね、そして差別という言葉の反対で融和親善。で各郡長に融和親善のために、一般の者と部落の者が一緒に集まって飯を食うというような会を開いてもらいたいと。これは大里郡という郡の郡長が言い出したんですが、大

里郡全体の部落の代表者と、それと一般の郡の、いわゆる代表者なんかに来てもらって宴会やりましたね。そして融和親善の必要を説いたんです。これが非常に部落の人たちに大きな自信をもたせる機会になったらしいですね。一緒に同じ弁当を食べるは初めてだというんで喜んでくれましたね。

それがだんだん他の分野にも広がってきて、各郡で融和親善会というものを作りました。これを一時のブームにしてはいかんと思ひまして、福利委員は直接にはあまり関係しませんから、別に部落の主だった人を委員にしまして、部落の融和親善の意味で、地方改良委員と言いましたか、そういう名前の委員制度を作りましてね。そしてその一般との親善の成果をあげるような努力をするように奨励したんです。そういう委員を20人ばかり選んで、関西の部落の様子を見に行きまして、滋賀県、京都、大阪を回ってあちこちの部落を見て回りました。まだその時は水平社は出来ておりませんでした。これが私の埼玉での一番大きな仕事でしょうね。

埼玉県には一年ちょっとしかおりませんでした。そのうちに、俺たちの仲間が県庁へ行行って、自分のことを言わないで偉そうに融和親善なんてやっている、気に入らん奴だと言うんで、新聞に投書した人がいるんですよ。滋賀県の部落の三上という人からでした。熱心にやっているけど滋賀県の部落のものであると言って……。こういう投書が来ましたよと、埼玉新聞の記者が私にもってきましてね、新聞には出しませんが参考にと伝えてきまして。猜疑心というか、妬みというか、そういうことが非常に多かったんです。これも埼玉で聞いた話ですが、東京の吉原の近くの非常によくはやる蕎麦屋に小僧に行った部落の人間がいたんです。非常によく働くと機転が利くので、店の主人に非常に見込まれて娘と結婚させたんです。それを部落の人間が聞いて、中傷するということがありました。

### 3. 愛知県庁時代と社会事業

#### (1) 貧困問題と部落差別

三上：これが非常に……。私が滋賀県の部落の人間だと言いふらす人間がおりますと、私にしてもだめなんです。これはよくないと思ひましてね。まあこの辺がちょうど切り上げ時だと思ひました。そこへちょうど愛知県から話があって、内務省の富田愛次郎さんが私に、愛知県に方面委員制度を設けるについて誰か経験のある主事を頼みたいと言って、君行かんか、こういう話がありましたね、ちょうどそういうふうな噂が出ている時ですから、この辺で切り上げようと思ひまして、それで愛知県に行ったんです。それが大正11年でした。愛知県に赴任したのが大正11年の5月頃でした。

永岡：記録では4月の22日付けになっておりますね。

三上：そうでしたか。

永岡：愛知県に来られた頃の町の様子はどうだったのでしょうか。

三上：明治43年に関西府県連合共進会があったんですね。これは名古屋が近代化されるエポッ

クになっているんです。鶴舞公園なんかもその時出来たんですが、人夫がたくさん必要だったんです。この辺の農家は皆大きな家が多いですから人夫に出ないんです。それですから近府県からたくさん人夫を雇い入れたんです。滋賀県は土地が狭くて、普通の農家でも次男、三男は皆、京都、大阪に出るんですね。とくに部落の人たちは土地を持っていませんから行き先がないので、高給がもらえるということで人夫としてだいが入ってきました。その上に、ここには西本願寺という寺があったんです。名古屋は東本願寺の地盤でして、西本願寺というのは一割もないんです。滋賀県の部落は大部分が西本願寺の檀家です。ですから、寺はあるし物価も安くて食べるのは楽だと……。この土地が非常に悪い土地で、いくら掘っても砂で、農地にはならないんです。名古屋でも農家はどこも荒地だった。そこへバラックを作って住み込んだんです。

永岡：愛知県でも、仕事を探して農村から来た人が多かったのでしょうか。

三上：この部落は幕府時代からあったんですが、飯田街道というのがすぐ近くにあるんですが、これは最初、家康が名古屋から岡崎への岡崎街道をつくったんです。それが伸びて飯田街道になっております。その街道の、ちょうど大手門から一里のところがありました。今でも一里塚という形で残っていますが、そこ向こうに白山の森があるんです。これは、信長が清洲から名古屋に移る時に清洲の白山神社の分社をつくったんです。その場所をいま白山分社と言っていますが、神社にはお守りするお寺がついてますね。今でも残っていますが、きれいな川が流れておりまして……。

こういうふうに街道筋もあってちょうど大手門から一里のところでは白山の森があって小川が流れて、白山の森の東側はいわゆる乞食のたまり場所に非常にいいわけなんですね。これがこの部落の始まりで、つまり非人たちが集まって出来たんです。それがもう四百年以上経っている場所なんです。その頃はこの辺も玄海と言い、お寺も俗に玄海寺と言われたんですね、玄海という坊さんがもといて大変徳のある人で信望を得たらしいですね。玄海寺を中心としてその非人がたむろし出したんです。その頃は人家はほとんどなかったらしいです。それで玄海の近くの浮浪者の評判が悪くなった。

それで、尾張藩がそれを取り締まるために、ちょうど裏街道の一里の所で、たくさんの森があるので、ここに関所を設けましてね、そして朝の6時から夕方の6時まで以外の通行を止めちゃった。捕虜もおったでしょうし留置場もできたでしょう。それで物騒な場所になったらしいです。塚という名前のつく町がいくつかありますが、馬の塚だと言っていますが、そんなことで一般の町人はね、ここに近づくのを非常に嫌ったんです。

私どもが来たばかりの頃は、ここは下奥と言ったんですが、一般には下奥とは言わないで玄海と言っておりました。子どもが泣くと玄海に言うぞと脅かすようなことが、私が来た大正時代にまだありましたからね。歴史的にそういうふうは無法者が多かったです。そういう関係から人々がここへ来るのを怖がったようです。

永岡：下奥田、平野町、蘇鉄町で、それぞれ歴史が違うのですね。

三上：平野町は「穢多部落」と言われていました。最初、柳橋の近くにあったのが、殿さんが通



るのに目障りになるというのでそれで平野町へ強制移転させられた。それで平野町がいわゆる被差別部落ということにされたんです。ちゃんと歴史的に出ています。王子町の場合はスラムなんです。平野町よりこのほうが大きいですが、平野町は仕事がありますから、経済的にはここよりもずっとよかったですよ。

(2) 愛知県への赴任と社会事業の創設 —— 愛知共済会、方面委員制度、共存圏

永岡：では、方面委員制度を作られる頃のことについて少しお話し願えますでしょうか。『愛知県方面委員制度十年史』などに簡単なことは載っているのですが。

三上：方面制度は実は私が来ましたのが大正 11 年ですから、その前の年にですね、名古屋市で方面委員制度をつくるという案を市の課長が考えて、予算を出したんですが、庁内で認められなかったらしいです。それが県の当時、課長の川久保常次郎、この人は鹿児島出身の人でしてね。この人が大正 9 年頃、10 年か、初めて知事が鹿児島藩出身の川口彦治が県知事になって来たんです。川久保常次郎氏は、自分と同じ藩の知事が来たのでこの時こそ早く一つ良い位置へ栄転したいというつもりでね。その川久保氏は中島郡の郡長だったんですが、それで川口知事へもう少しいいところへやってもらいたいと言ったんです。少し待ってろ、俺が少し考えてやろうと川口さんが言ったそうです。そしてしばらくしてから社会課を作りそして社会課長に川久保氏を据えたんですね。で中島郡から県に入れた訳です。しかし愛知県へ行っても予算はないし、仕事のしようがない。何かしようと思ったときに、前年市が方面委員制度を庁内で潰されたと……それで県の方で方面制度を作るというのを自分の仕事にしようと考えたらしいですな。

それには誰か方面制度に経験のある主事を雇おうというので内務省に相談に行ったんです。そこで富田さんに会ってその希望を述べた。それなら埼玉県に三上があるからついでに埼玉県に行つて三上に会ってみたまえと言ったそうですわ。それで 10 年の 1 月頃、川久保さんが東京から埼玉に来ましてね。ちょうど愛知県に感化院の移転改築の問題が起こった時です。埼玉には国立の感化院（武蔵野学院）があったものですから、それを見にやってきたついでに県庁によって私に会った訳です。それで私に感化院を案内させたんですね。埼玉県で自動車出して、県の自動車では川久保さんを案内して国立感化院に連れて行ったんです。その時に、一つ愛知県で方面制度を作りたいと思うけど君は福利委員の経験を持っているから愛知県へ来てくれんかという話を直接されたんです。で私はすぐお返事しかねるということで、それから内務省に行つて聞いたら富田さんが、それは僕が推薦したんだ、行けるなら一つ行ってくれという話で、それで急に決まったんです。それで愛知県に行つて方面制度をつくるというのが私の使命だった訳ですね。

それで 11 年の 4 月に来まして、一番最初に方面委員制度は今年予算がつくんだと……。それまでに愛知共済会という会が、いま 4～50 万の資金をもっているんだ。この愛知共済会が僕には面白いんですが、これは川口さんが作ったんじゃないで川口さんの前の知事の宮尾舜治さんが計画して民間の会として大きな財団をつくるつもりで名古屋の財閥、大きな会社の代表者を 7、8 人集めて相談会をやったんです。伊藤次郎左衛門が名古屋の一番の財閥だった。名古屋には……

松井知事は民間に作らせるというつもりだったんでしょう。相談会をやりまして、そういう財界の主な人達を7、8人集めて夜、知事官邸で一席設けてそういう了解を得た訳なんです。その場合、その人は皆いずれその話があると予期していたものだから、まず名刺に自分達の思惑の寄付金額を書いて知事に出したんです。皆予期していたらしくて5万円という大きい額でした。伊藤次郎左衛門（当時、襲名前の伊藤守松）が5万円でした。他に5万円の人は2、3人あったと思いますが、それから4万、3万、2万と皆金出した。そうしてその明くる日に、内務省から宮尾知事の転任辞令があったんです。転任の電報が来たというんです。

永岡：翌日だったんですか。

### (3) 川口知事時代と共存園の建設

三上：集まった翌日です。そんな話はもう全然表に出ないんです。官房主事も知らないと言う。知事の側近の人がおってお世話したんでしょう。その後に川口知事が来て、社会課をつくって川久保常次郎を課長にしたんです。で、仕事がない、と困ったんですね。官房主事がね、宮尾知事が引き払って川口さんが入ってきて、官邸の机を掃除したところ、そこにね、金額の書いた名刺が入っていると言うんです。5、6枚その他にも書き付け物があって。これは何か訳があるだろうと思って、官房の関係した会議があったんでしょう。それに聞いて、宮尾さんがそういう会をつくる予定でいたということが分かったんです。

その金額の書いてある名刺を残しておいたんです。それを官房主事が社会課の出来た時に社会課の人に、こういうものが宮尾さんの机から出てきた、何かものになりはしないか、なるのなら一つ考えたまえと渡したんです。そしてそれを川久保課長が見て、一遍こうして約束した以上は、まさか知らんとは言わんだろう、それで名刺の出ている人達に集まってもらって、そうして宮尾さんの時の話を蒸し返した訳です。そうして会をつくり、皆了解してそうして初めて愛知共済会というものが出来たんです。川口知事が発起した訳じゃないけれど、結局、川口知事がつくったという形になったんです。

永岡：宮尾知事の時にそういう会を作っていて、その川口知事への引継ぎはなかったんですね。

三上：引継ぎはないです。何もありません。それはね、前の晩ですから、まだどうなるかわからん、ただ約束だけのものです。それもですね、もっと大きくその人達が発起人になって県下全体から寄付を募って大きな財団をつくるという案だったんだと思うんです。そんな風ですから、それを川口知事、川久保課長が引き継いだ。それでその約束している金だけを集めても4～50万円になったんです。川口知事は来たばかりですから、それ以上もう大きくするという気はなかったんです。それで、宮尾知事の置きみやげを法人にして、はじめて愛知共済会という財団法人が作られたわけです。で、川久保課長が常務理事になったわけです。私は来るなり愛知県社会主事であり、同時に愛知共済会の主事でもあったんです。その時に寄付者が年会費で金を出そうという話になって、とりあえず5万円集まった。その5万円をなるべく早く使って、あとまた貰わないといけな。いわゆる社会事業というものはどんなものか一般市民に見せたいと、そういうもの

を一つ市内のどこにでもいいからつくれと、これがまず最初の仕事だったんです。

永岡：全く初めからということですね。

三上：ええ、私が来るなり方面委員制度を作るのは表向きの仕事ですけど、さしあたって言えば愛知共済会の5万円の金を全部使っていいから社会事業施設の見本をつくれということです。これは、初め私は埼玉県でも経験があるから県庁へ出るなりすぐにやれということですね。当時市内に三つスラムがありましてね、この奥田町と下奥町と、平野町ともう一つ名古屋駅のすぐ近くに木賃宿の固まりのある蘇鉄町……今はもうなくなっていますが、名古屋駅の南東の方に木賃宿が数十軒ありまして……いわゆる労働者の町ですね。東京の山谷、大阪の天王寺のふうですね。そこへちょうど良い地面がありましてね。300坪くらいで狭いけど、そこへいわゆる小さい隣保館をつくろうと思ひまして、すぐその設計の略図を書いて課長に出したんですね。すると、結構だからすぐやれと。そうしてそれを専門家に図面を作らせてましてね。保育園を中心にいわゆる隣保館を作らせたんです。まあ、保育園ですね。当時のいわゆる小さい隣保館の見本が、サンプルが出来た訳なんです。そこへ、ちょうど大震災が起こりましてね。大正12年ですから。

永岡：こういう隣保館で一応基礎的な考え方を実現されて、その後いくつか出来ていますが……

三上：それが共済会なんです。その他にもあの時に共済会がいくつかつくりましたね。

永岡：これがその後の各地の共存園の原型なんですね。

三上：最初の私が愛知県に来て一週間くらいの時にやり出したんです。

#### 4. 方面委員制度と社会事業協会の事業

##### (1) 方面委員制度の設置と担い手

永岡：方面委員制度はいつから取り組まれたんですか。

三上：それで早速、方面委員制度の予算を作る計画をつくるわけなんです。方面委員を実施するには、愛知県というのは非常に保守的なところでしてね、保守的で現実的で、実際を見ないとなかなか信用しないところなんです。非常にそういう意固地なところがありまして。昔から、そう困ったことはない、いわゆる親藩で土地も豊饒ですね。問題のあまりないところで、いわゆる社会事業の必要をあまり感じないところですから、社会事業といったって、うっかり乗って金を出す約束なんかすると馬鹿らしいというような、そういう気分の大きな所だったんです。ですから方面委員をつくる時もね、内務省の人がね、反対したんです。名古屋というところはケチなところだから、ただで人の世話をする人間はいない、失敗するからやめろ、こういうのが内務省の人の意見でしてね。それを川久保氏がしつこく話して予算を獲得したんです。最初に計画したのは比較的貧困者が多い4つの区で、各区に2カ所ずつ方面をつくって、一つの方面に5人ずつ委員を置いて、合計40人の委員で、それを一年間じっくり教育してみようと思ったんです。

当時、私の理想も高すぎたんですが、ケースワーカーとして訓練しようというつもりだったんですね。埼玉県では一遍に全県下に福利委員をつくりましたが、何もしないところが多いんです。

それではどうもいかなからと思って、委員は自分の受け持ち地域の調査から始めて皆働く、いわゆる理想的なケースワーカーをつくらうと、こういう考えを持ったんです。私、その頃、リッチモンドのケースワークの思想を読んでおったものですから……。

永岡：まだアメリカで本が出てまもない頃ですね。

三上：当時は難しくて、よりケースワーカーに似たようなものにしようというつもりになって、それには、なるべく人数は少ない方がいいんです。大勢いても出来ないから、暇がありそうな、物好きな、そういう人を40人集めてじっくり一年教育してみようと、これが私の考えだったんです。ですからその旨を書いて6,7千円足らずの予算を出したんですよ。ところが反対でね、とうとうそれはやっと半分認められて3千3百いくらになりました。

永岡：予算では大正11年で、総額で3,895円ですね。

三上：ちょうど私の出した予算の半分なんです。それでやっと通りましてね。その前から2人書記を入れましてね、県吏員の書記を入れまして、私と3人でいわゆるケースワークとしての方面委員をつくる、それには書記にまず教育して……。

永岡：書記の一人で、大阪市から中野実行さんという方をお呼びですね。

三上：これは広島のやはりお坊さんでしてね、龍谷大学の出身でした。あの頃大阪の弘済会の会長が私の先輩で懇意だったものですから……。

永岡：上山善治さんですか。

三上：上山君です。あれはすぐ先輩で、誰かいい人を寄越してくれと言って……。

永岡：方面委員の事業をやるために引っ張ってきたんですね。

三上：方面委員やるためですね。それでもう一人、小学校の先生だった4~50歳くらいの年輩の人を入れました。後藤さんと言いました。

永岡：後藤吉三郎さんですね。もう50歳くらいになっておられたんですか。

三上：後藤さんは学校辞めて、校長になったんだったか、辞めたばかりでした。それで3人で机を並べて、予算をとって人選を進めてやり出したんです。任命が8月でしたからね。それまでにあらかじめ訓練しようと思って、大阪から小河さんに来てもらいまして、2か間講習を開いたりしました。それは委員を任命してからですが、初め任命したのは35名だったです。人選にはこういう方法をとったんです。私ども名古屋に初めて来たもので分かりませんから、警察と、それから方面は学校単位にしましたから、学校の校長と、郡役所の郡長の3人にして、秘密で、今度このような委員をつくるについて適当と思われる者を5人推薦してもらいたいと、その3カ所に特別に頼んだんです。そして推薦された人名の中から3カ所とも出ている人を第一候補にし、2カ所から出ている人をその次というふうにしまして、それを標準にして、それだけじゃなしに3カ所から出ている人を、私、自分で面会しましてね。

それまで秘密になっていますから、何のために私が会うかももちろん知らない訳です。そして今度こういうような方面をつくるので、あなたに一つこの方面委員になってもらいたいと……。誰もが一応辞退します。それをこの人は良さそうな人だと思って頼み込んでいけば、悪い気はしな

いから承諾してくれる。そしてその人に、あなたが一緒に仕事のできるもっとも親しい人を2人でも3人でも推薦してもらいたいと……。常務委員をまずつくって、その人から後の委員も推薦してもらう。推薦の参考にこういう調べが出来ているから、できたらこの中から選んでもらいたいというようにして、後の人を出しまして。そういう方法で一つの方面に5人ずつ委員をつくったんです。それは4人しかできないという所もありましたから、40人はできなくて35人でした。最初から常務委員を中心にするという方針で私はやったんです。これはよかったと思います。各委員の調和が非常によく出来ました。そしてその委員と一緒に毎晩どこかへ後藤君と出張しましてね。中野君はまだちょっと若かったですけど。そして5人の人が集まって一緒に相談する、そして一週間に1回私が出て教育するという方針でおったんです。そこへ、9月1日の関東大震災が起こったんです。

大震災が起こって四日目ぐらいからどんどん避難民が中央線で来るものですから。みな名古屋で一晩降りるんです。そういう人たちの救援場所になったですね、食糧はもちろんですが、風呂に入れてあげたり着物を洗濯してあげたり、ここが一つの援助というか避難所になりましてね、その時、方面委員も志願して救済にあたったんです。これは困ると私は思ったんです。方面委員がそういうエマージェンシーの救済だけを自分の仕事だというように考えては困ると思ひましてね。いわゆるケースワークの仕事を訓練していこうと思うのに、そういう余分なものが出来てきたものですから困ったんです。でもこれは抑えるわけにいきませんから、それから一月ほとんど関東大震災の被災者の救済に追回されて過ぎてしまいました。さっきの共済会の施設も一時の宿泊に使うというんで、もう万事がそういう特別な救済機関の形になってしまいました。それが一応一段落した時に初めて、小河さんに方面委員制度のいわゆるケースワーカーの話をしてもらったんです。

## (2) 小河滋次郎と社会事業の改革

永岡：小河滋次郎は県の顧問になっていますね。

三上：あれは、その前に愛知県知事だった松井茂さんと小河さんは懇意だった。松井さんが小河さんと呼んできて大阪と同じように顧問になってもらって。そしてこれは金がないから社会事業の一種の啓蒙運動をやっていたんですね。しかし金を全然集めていませんから、裏付けする仕事がない。愛知県救済協会が出来ましたが、それは松井さんがいなくなると同時に消えてしまったんです。しかし松井さんのおかげで社会事業というのは県内の方々の人に非常に知られるようになりました。その時に小河さんがどんな話をされたか何も書いたものはありませんからね……。松井さんは愛知県に6年間おりました。随分長かったもんです。あの人は元来が警察の専門ですが、警察の一種として救済を考えていたぐらいでしたね。

永岡：大正6年頃に、すでに愛知県救済協会が出来ていますね。

三上：ええ、大正2年から7年頃まで。

永岡：大正2年から続いているのですか。



三上：大正2年頃から松井さんが始めて……，救済協会は5，6年からでした。

永岡：その時から小河滋次郎は顧問として指導していた……。

三上：ええ，大阪から来てもらって作ったんですね。しかし私，愛知県の主事になってから小河さんと話したんですが，愛知県で小河さんは，坊さんたちに非常な不信感をもっておられて，どうも坊主はだめだと言っていました。坊主，それから学校の教育者出身，警察官出身，こういう人はだめだ，そういうものはあまり委員にしない方がいいと……。これは小河さんが私に忠告した最初の言葉です。

永岡：大阪での経験があったんでしょうか。

三上：大阪の経験からでもありましょうが，愛知県に来て県の顧問として仕事をする時に，どうも坊さんが多くて，それが「やるやる」と口だけは言うけれど，誰も金を集める力がないらしい。資金がない。これは小河さんが坊主はだめだと言われたもとだと思います。愛知県は，一般の檀家から金を搾り取るお寺が多いんです。私，今書いているんですけど，社会事業とお寺は商売敵なんです。寄付をせびりとる……両方ともせびりとる方ですからね。私が愛知県に来て一番最初に驚いたことは，区役所に行った時，移転届をする窓口であんたの宗教は何ですか，と聞いたんですけどね。僕は社会事業をやってるんだと言うと，県庁の人が社会事業やるんですかと聞く。社会事業を担当するというと，そんなことは，あなた言わんほうがいいですよ，と区役所の人言うんです。なぜだと聞くと，社会事業というのは非常に評判が悪いんだと……。

私が愛知県に行った時，社会事業家というのはごまかしが多いというふうに世間で言っていて，最も信用のなくなった時だったんです。その少し前に，ある社会事業団体が，資金がないものだから寄付を集めて，そして自分の家族の生活費を出している，そういうのが多かった。少なくとも3カ所か4カ所あったんですよ。今考えてみると無理はないんです。寄付金が非常に集めにくい所ですからね。土地の人は皆，よそから来た者には……。それに，その少し前に帝国救済協会というのがあって，閉鎖を命じられている。どうやらそれは，園長が自分の養っている子どもを……。そんなことがあって非常に評判が悪くなって，現に私が来たとき，課長が今ある社会事業は皆まやかしものだから，これを撲滅するのが目的だ，一方で模範的な例をみせる。そして今あるのは全部やめさせてしまうんだ，こう課長は言っていました。川久保課長というのはとても強気な人だったですから。

あまり課長が悪く言うから，ある施設に行って調べ見たんですが，向こうじゃ県庁を敵のようにしてしましてね，私はちゃんと岐阜県に地面を持っているんだ，玄関の前に米俵三つ積んで見せて，これが自分の国の小作米だと。こうして決して自分の利益のためにやってるんじゃないということを見せてね。調べてみると水道，炊事場と毎日書いてあるんですが，雑費として大体2円か3円落としてあるんです。雑費は何だと言うと，これは職員やなんかの食費だと，自分と職員，自分の娘やなんかの……。結局，自分たちの実家がそれで食べているのが分かりますね。そんなことしないで，あんたはちゃんと月にいくらという給料をとってあるじゃないかと……。ところが給料をとるだけの収入がないんです。収入はどうしてるんだと聞いたら寄付金です。寄付



金も、市内では信用がないのでもう貰えんから、遠方の県の寄付の許可を得ているんです。その許可証を皆、月にいくらかで売るんです。わけのわからないのがそれを月 5 円とか、10 円とかで買って、その権利で許可証を見せて集めて回ってるんです。5 円なり 10 円なり納めて、あとは自分の懐に入れるというようなことで。これが当時の寄付募集の実態だったんです。そんなことしているから、ますます評判が悪くなるというんで……。

永岡：そうしますと、それまで起こっていた問題をなくすことと、新しい社会事業をつくることとの両面があったんですね。そういう問題が一段落して、社会事業が順調に進むのはいつ頃からでしょうか。

三上：大正 12 年の大震災後ですね。その後、初めて小河さんに直接来てもらいましてね。

永岡：中野さんという方は随分早くお亡くなりになったと記録に出てきますけど、ご病気だったのですか。

三上：当時はちょっと若いものですから、私は後藤君の方を主に相談相手にしていました。よく働いていたんですがね。私が愛知県やめてから亡くなったと思いますが。お調べになって何か出てきませんか。

永岡：『愛知県方面委員制度十年史』や『愛知県社会事業概要』などいろいろと見てみたのですが、中野さんは大正 15 年の 9 月まで、3 年間ぐらいで辞めておられまして、その理由は何も書いていない。

三上：別に何かあって辞めたというようないことは……。ああ、学校の先生になったかな。市邨学園の学校の先生をしていました。その方の専任になったんですかな。

### (3) 愛知県社会事業協会の設立とその後

永岡：それから、愛知県の社会事業協会が設立されますね。

三上：ええ、愛知県社会事業協会は、愛知共済会が名前を変えて社会事業協会になったんです。これは、川久保さんが辞めましてね、川村秀文さんが課長に来たんです。この人は、またなかなかやり手でしてね。東京都の見習いをしまして、初めて愛知県に理事官として課長になってきたんですが、仕事の好きな人でした。今もお元気で、川村女学院（現・川村学園。母の川村文子が創設した）の理事長をしています。

永岡：東京にある学校ですね。

三上：川村さんというのは、親が台湾総督をしていました。

永岡：川村竹治さんの息子さんですか。

三上：ええ、長男です。そして奥さんは菊池大麓（近代の代表的な数学者。政治家としても活躍した）の娘さんです。美濃部達吉や、末弘厳太郎、あんな人の奥さんと姉妹です（長女は美濃部達吉に嫁し、三女は末弘厳太郎に嫁した。川村の妻・百合子は五女である）。なかなか、やり手ですよ。私は川久保さんに仕えたのは一年足らずでしたが、それから川村さんになったんです。川村さんは私と中学が同じで先輩なんです。中学も高等学校も同じな関係だから、大変親しみを

もっておりましたがね。川村竹治の息子で、親が親だから、知事とも対等に何でも交渉するような格好でした。

永岡：川村さんは社会事業には意欲的に取り組まれたんですか？

三上：なかなか意欲的でした。それは川久保さんよりはずっと上でしたね。課員も、川久保さんだった時には最後に12、3人になりましたか。それが川村さんになりましたら一年間のうちに50人になっちゃった……。東大、慶応、早稲田、東洋大学など、方々へ職員募集の手紙を親展で出しましてね。適当な者があったら推薦してくれと……。そして推薦をさせておいて、それで1月に自分の家に帰ると集めて、その者を実地に試験をするんです。大石三良君なんかもその時試験を受けて来た。

永岡：大石三良さんは、みよしと読むのですね？

三上：そうです、みよしです。

永岡：大石さんは川村課長との間はどううまくいっていた？

三上：ええ、大石君もやり手でしてね。大石君が主にやっている時は、川村さんはもういなかったです。川村さんは、私がいる間に2年ぐらいで代わりましたね。神奈川県に行きました。大石君は、その後岩村法務大臣の秘書官で活躍したんですが、戦後、福祉新聞をつくったり……。亡くなってからもう十何年になりました。

永岡：そうしますと、そうした経過で愛知県社会事業協会もできるわけですが、三上先生は協会の方でも、当初はずっと主事として中心だったんですか。

三上：愛知県社会事業協会の主事でした。県の役員がもう全部社会事業協会の役員で、社会事業協会の役員が県の役員だった。これはもう区別なしなんです。それというのは社会事業協会の一番大きな仕事は王子地区の改善問題で住宅改良が中心ですが、これをやるのに、当時のお金で2百万円かかってるんですね、これをやるのに川村さん、いちいち会計課長まで順序踏んで決済をやるのは面倒くさい、そうしたらこの仕事は出来ない。それで、初めから、自分が常務理事になりましてね。知事が会長になりました、そうして全てができるようにしようというのが社会事業協会をつくったことなんです。最初は、愛知共済会も、この人が会長だったんです。

永岡：民間の団体としてですね。

三上：民間の団体です。だからそれをまず、県でやれるようにしようと、県の団体にして知事が副会長だったから、副会長と会長を入れ替えて知事を会長にして、自分は常務理事になり、もういちいち相談する必要はなしになって……。そうして県の費用とすると会計課長の判がいるから、それは面倒だということで、社会課長と知事の判で用を弁ずるようなものにして、それですから役員も県ではそうたくさん出ないから、県から社会事業協会の方へ補助金を出して、社会事業協会の名前で職員を皆採用したんですよ。

永岡：県の職員の他に、社会事業協会職員という形で県とは別に採用する訳ですね。

三上：私どもは県の職員です。名前も社会事業協会の兼任としているんです。中には社会事業協会の給与をもらって県の嘱託になっているものもあります。

永岡：そうしますと、協会の役割として民間社会事業の組織化とか連絡調整といった役割の面ではどうだったのでしょうか。

三上：そういう意味のものじゃなくて、愛知県社会事業協会はどんどん創っていく方だったんです。いろんな施設を、それで共存圏も方々につくりました。それから民間のつくったものを吸収したり、吸収しないまでも監督するというふうにして…… 事業団体ですね。

永岡：大阪の組織の場合とは内容はだいぶ違うんでしょうね。

三上：そうですね。今、社会事業協会は王子地区の住宅改善だけになっています。今度、市の事業になると、社会事業協会はなくなってしまう訳ですね。

永岡：そうしますと、県社会事業協会は戦後の愛知県社会福祉協議会とは直接結びついていないんですね。

三上：これとはね、全然別個です。社会福祉協議会の方は戦後の法律で出来ていますから、これはこれで別ですね。社会事業協会の方は県庁がやっていますから、今度住宅改善をやるにしても、市が社会事業協会から移管するという形になるんです。社会事業協会が今の居住者にどう対処するかということを今やっているんですが。

#### (4) 「共存」の刊行とその後

永岡：あと一つだけお聞きしたいのですが、社会事業協会の機関誌として「共存」が1924年に創刊されていますが、刊行の経過についてお教えいただけますでしょうか。これが創刊号なんです。3カ所の図書館や資料室で全部揃いまして、今、大学でマイクロフィルム化の準備をしているところです。

三上：これはやはり一見したいものです。

永岡：重要なところだけ持ってきたのですが、すべてコピーできますので、あとでコピーしてお持ちします。

三上：これはあなたが書いて出せばいい。もうこれだけ材料をお持ちだったら、私が今度書くものも材料にしてもらって、改めて県の社会事業の歴史をまとめてほしい。

永岡：まだ若いので、もっと基礎資料を集めてからまとめたいなあとと思っています。

「共存」は4巻あたりまで、ちょうど三上先生がおられた頃になるんですね。編集の実務の方はどういう方だったのでしょうか。

三上：新聞小説なんかにはね、二等当選したというので文士気取りでしたが、ちょっと文も書きましたね。

永岡：この方は社会事業の実務方面のこともやっておられたんですか？

三上：これはほとんど社会事業じゃなくて……

永岡：編集のことだけですか？

三上：そういうものをしていました。

永岡：「共存」はちょうど7巻で廃刊になりますね。冊数は少ないですが、内容は充実していて、

とても重要な雑誌だと思うんです。いわゆる中央の「社会事業」、大阪の「社会事業研究」、東京の「社会福利」に次ぐような位置にある……。

三上：あの時分は、愛知県が社会事業の盛んな県と言われましたよね。その後、衰えましたけども。

永岡：重要な雑誌なので、できれば、日本福祉大学でも何らかの形で復刻ができればと思って進めているんですが。

三上：そうですね。そういう価値がありますかしら。

永岡：編集者は最初、三上先生で、そのあと鶴田主事、宮田主事となっていますが、実際にはどのように編集をされていたのでしょうか。

三上：実際の編集事務には新聞記者上がりの者が誰かおりましたよ。一番最初は新聞記者の人でした……。

永岡：三上先生の時は、業務の中で雑誌のウエイトは大きかったですか。

三上：雑誌はね、つくるのは私と課長が話してやりだしたんですが、大石君が来るより前ですわね。とにかく調査研究をやろうというので、それが中心でした。その時に愛知県児童研究所を作りましてね。これは独特なものでしたよ。

永岡：それは社会課でつくられたのですか。

三上：社会課でつくったんです。覚王山に相当な建物を造りまして、これは日本で最初のものでしたでしょう。丸山良二君（1925年児童研究所主事、1927年同所長）という大学の心理学教室におった人を引っ張ってきましてね。

永岡：心理学というと、どちらの大学でしたか。

三上：たしか高等師範（東京高等師範専攻科）出身で、東大の心理学教室へ研究生として入ったんです。私があの時の心理学の部長に頼んで誰か一人推薦してもらいたいと言ったんです。そしてその人を推薦してもらって……。

永岡：この方もいろいろたくさんお書きになっていますね。

三上：「愛知県児童研究所紀要」と言いましてね。これは三巻か四巻が出てますでしょ。これは相当立派なものです。当時国際連盟から送ってくれと言ってきました。この紀要、これは丸山良二君が辞めまして、東京に帰りましてね、その後へ石川七五三二（しめじ・戦後山梨大学教授）という人が来たんです。この石川七五三二氏が、どうも社会的活動が何かがあったのか知らんが、県会で児童研究所の予算も削ったんです。それで潰れちゃったんです。惜しいことでしたがね。石川氏は今も大学におられるでしょう。

永岡：やはり大正末期から昭和初期にかけて随分活発になっていったんですね。

三上：ええ、愛知県はあの時分は社会事業として相当認められていましたね。

永岡：「共存」という雑誌も昭和6年に突然廃刊するんですけども……。

三上：私は昭和3年までしかおらないのですから。

永岡：もうおられない時ですね。名古屋へお戻りになってからでも、何かお聞きになったことは

ありませんでしたか。

三上：全然わかりませんね。

永岡：急に廃刊宣言を出してなくなってしまうので……。

三上：これは何でしょう。大石君がいなくなり、もう中心になる者がいなくなったんでしょうね。「共存」という名前がいいと言って。社会連帯は共存共栄とは少し違うんですがね。

永岡：「共存」という言葉は誰が考えられたんでしょうか。

三上：あれは課長が言ったんでしょうね。

永岡：大石さんはなぜお辞めになったのか、ご存じですか。

三上：知りませんが、大石君とは始終交際していましたけど、辞めてから県庁はガタッと変わりましたね。

永岡：大石さんが辞めてから変わったのですね。

三上：大石君が辞めてから……。大石君が行ったのは、私がこちらに戻ってきてからでした。

永岡：貴重なお話をいただき、どうも有り難うございました。その後の衆善会時代のことについては、改めてお教えいただきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いいたします。

三上：私、今度、愛知県社会事業史を書いておりますが、私の記憶のある所だけ書きますが、その後ひとつあなたに続けていただけませんか。そして足りないところは加えていただいて、二人で書きましょう。私が書くのにもあなたのご意見も入れていただいて結構ですから。愛知県の社会事業史研究を共同でやろうじゃありませんか。エピソードを含むもので、元・平野町共存園の保母さんで書いた人がおりますけどね（重賀よしを『しらみ、疥癬、南京虫——私が歩いた児童福祉への道』私家版、1973年）。面白いものです。そういうものを私も持ってきますから。

永岡：先生は当時のことをすべてご存じですので、それを私もぜひ手伝わさせていただければと思います。

長時間有り難うございました。愛知県の社会事業史研究がこれから発展することを願っております。

(終了)